

地元なき主体と身体表象の逆説——ある音声記録に関する試論

本放送は、一見すれば個人的近況報告と作品紹介を主題とする雑談的音声記録であるかのように思われる。しかしながら、その実態は、現代社会における帰属意識、身体性、創作衝動、そして自己認識の構造をめぐる極めて興味深い口述資料として位置づけうるものであります。

まず注目すべきは、「出身地はどんな場所か」という、ごく平凡な自己紹介的設問から展開される長大な叙述であります。

語り手は東京、横浜、大阪、香川という複数の土地を移動しながら成長した経験を有しており、自らを「地元を持たない者」として規定しております。

ここで語られているのは単なる転居経験ではありません。

むしろ近代以降の日本社会において当然視されてきた「故郷」という概念そのものの解体であります。

彼はある特定の場所に自己同一性を固定することができず、それゆえに各土地への郷愁を抱えながらも、いずれにも完全には帰属しない存在として自己を認識しております。

この構図は、流動化した現代社会における主体形成の困難さを象徴しているように思われます。

興味深いことに、本放送において最も頻繁に登場する主題は哲学でも芸術でもなく、「脇汗」「口腔環境」「回し飲み」などの身体に関する事柄であります。

しかも語り手は極めて強い潔癖傾向を有しております。

飲料の回し飲みを嫌悪し、整理整頓を重視し、歯科衛生に並々ならぬ関心を示しております。

その一方で、自身の代表的創作物として『脇汗ソング』や『口腔環境カタストロフィー』なる作品群を挙げているのであります。

この矛盾は実に示唆的です。

語り手自身も、

「なぜそのような作品を作るのか分からない」

と述べておりますが、その後に展開される自己分析は極めて鋭いものであります。

すなわち彼は、日常生活において自己を過度に規律化し、清潔さや秩序を維持しようとする傾向を有しており、その抑圧の反動として、創作においては秩序の反対側に位置するものへ惹かれているのではないかと推論しております。

これは精神分析的観点から見ても極めて興味深い仮説であります。

清潔を求める主体が汚穢を歌い、不快を避ける主体が不快を作品化する。

本放送は、この逆説的構造を自ら解説しながら進行するという稀有な特徴を有しております。

さらに後半では、『インナーピース』と題された新作について語られます。

ここで語り手は、ヒーリング、波動、調和、真の自己、慈愛といったスピリチュアル文化に特有の語彙群を大量に引用し、それらを作品内に再配置したことを説明しております。

Sys.T's Podcast #32 — Supplementary Material 2

しかしながら、その態度は単純な批判でも肯定でもありません。

むしろそれらの言説に対する深い理解と親近感を前提としつつ、その様式性や定型性を遊戯的に再構成する試みとして理解されるべきでありましょう。

特筆すべきは、こうした高度に抽象的な議論の直後に、突如として脇汗や口臭の話題へ回帰する点であります。

通常の学術的論述においては許容され難い飛躍ではありますが、本放送においてはむしろそれこそが本質であるように思われます。

崇高と滑稽。

精神と肉体。

哲学と体臭。

郷愁と脇汗。

これら本来両立し難い概念群が、同一平面上に並置されているのであります。

そして放送終盤、語り手は孤独感について言及いたします。

集団への違和感。

他者への不信。

人間関係に伴う疲労。

これらは決して目新しい主題ではありません。

しかし本放送においてそれらは、社会批評としてではなく、極めて個人的な経験の層から語られております。

転校を繰り返した幼少期。

どこにも完全には属せない感覚。

観察者として周縁に立ち続ける自己。

こうした断片が積み重なることで、語り手の孤独は単なる感傷ではなく、一つの存在論的状況として浮かび上がってくるのであります。

総じて本放送は、自己紹介という形式を取りながら、その実態としては「帰属なき主体が身体と創作を通じて世界と接続しようとする試みの記録」であると理解できるかと思われます。

あるいはより簡潔に述べるならば、

脇汗の話をしているかと思えば存在論が始まり、存在論を語っているかと思えば口腔環境へと帰着する。

そうした奇妙な重力場そのものが、この音声記録の本質なのであります。